



Title	ハイパーインフレーションの人類学的研究 : 2008年ジンバブエにおける多元的貨幣現象
Author(s)	早川, 真悠
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/60013">https://hdl.handle.net/11094/60013</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	早川真悠
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第26077号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	ハイパーインフレーションの人類学的研究：2008年ジンバブエにおける 多元的貨幣現象
論文審査委員	(主査) 教授 栗本 英世 (副査) 教授 小泉 潤二 教授 中川 敏 准教授 森田 敦郎

## 論文内容の要旨

本稿は、2007年から2008年におこったジンバブエのハイパー・インフレーション下における貨幣現象について人類学的考察をおこなうものである。

南部アフリカの内陸国ジンバブエでは、2000年以降、深刻な政治・経済危機に陥った。現地通貨ジンバブエ・ドル(以下、ZD)の公式インフレ率は、2007年3月には月率50%、年率2,200%を超え、ハイパー・インフレに突入し、2008年7月には月率2,600%、年率2億3,100%に達した。本稿では、ハイパー・インフレ時におこった、現金と預金の交換不可能性、外貨の浸透、高額紙幣と小額紙幣の計量的不整合といった現象を、多元的貨幣現象ととらえて考察をおこなった。

序章では、ハイパー・インフレを人類学的に研究するための考察視点を、経済人類学の先行研究から検討した。経済学においてハイパー・インフレは、「現代経済の解体」とされる。この認識には、経済にはただ一つの全目的貨幣が流通するという前提がある。一方、経済人類学の先行研究では、こうした一元的な貨幣論が批判的に検討されてきた。世界的・歴史的に見れば、ひとつの社会に複数の経済領域が存在し、領域ごとに共約不可能な複数の貨幣が併存することは珍しいことではない。こうした多元的貨幣状況の可能性を踏まえれば、ハイパー・インフレは必ずしも「現代経済の解体」ではなく、多元的貨幣状況の現れと捉えることができる。

第2章「現金」では、インフレをおこしている現地通貨ZDが消滅することなく、人びとに使われ続ける側面を示した。ZDはときに実質的な減価を度外視されながら、人びとに受容され、使われつづける。このように、インフレ下でもZDの貨幣体系が不完全ながら保たれている。

第3章「預金」では、ZDの現金と預金の貨幣価値が乖離した現象について考察した。政府による預金封鎖により、1日当たりの引出し限度額がきわめて低く設定された。その結果、闇市場では現金が預金よりも高い価値で取引された。闇市場と正規市場とのあいだに生じた現金と預金との交換比率の差を利用すれば、利益を得ることができる。こうした行為は「カネを焼く」と呼ばれ、倫理的に問題視されながらも、人びとのあいだに広まった。

第4章「外貨」では、外貨(米ドル)が人びとの日常経済に浸透していく過程について考察した。外貨化の過程には2種類ある。ひとつは、商品に外貨の固定価格をつけることである。もうひとつは、ZD価格をその日の外貨交換レートをを用いて外貨価格に換算する方法である。後者の外貨価格には、

基礎となる ZD 価格体系が日々変動するため、換算された外貨価格も不安定に変動する。後者の外貨化の過程は、外貨を単一尺度として用いない。そのため、たとえ外貨が浸透しても、即座に ZD が駆逐され貨幣の一元化が生じることはなかったと言える。

第 5 章「高額紙幣・小額紙幣」では、ZD の高額紙幣（10～100 兆 ZD 札）の消滅（受取り拒否）、および高額紙幣と小額紙幣（500 億 ZD 札）とのあいだに生じた計量的不整合を考察した。インフレ末期に発行された上記紙幣は、額面の開きが大きすぎ、お釣りを用意できないなどの問題が生じた。最終的に高額紙幣は使えなくなり消滅した。一方、小額紙幣は外貨のコインと交換可能とされ、複数通貨制（公式な経済の外貨化）以後も、流通し続けた。

以上、ジンバブエのハイパー・インフレ下における多面的な貨幣現象を示した。ジンバブエの政治・経済危機については、さまざまな統計データにもとづいた考察がおこなわれている。これらのデータを考察する際、当時の多面的貨幣現象の実態を踏まえれば、より豊かな分析が可能だと考えられる。

### 論文審査の結果の要旨

南部アフリカのジンバブエは、2000年以降深刻な政治・経済的な危機状況に陥っている。とくに2007年から2009年にかけては、年間の物価上昇率が2億パーセントを超える、つまり100円の商品の価格が1年後には2億円になるという、想像を絶するハイパー・インフレーションの状態が発生した。本学位申請論文は、この常軌を逸した状況下で、一人の生活者として首都のハラレで暮らした著者の「生きられた経験」に基づく民族誌である。ジンバブエの貨幣であるジンバブエ・ドルの価値が日々急激に下落し、基本的な食料品や生活必需品の購入が困難になる状況のなかで、人びとがいかに生き抜いていったかが、商品の価格と貨幣価値の変動に関する詳細なデータをもとに、興味深い具体的事例を散りばめつつ、1年数か月におわたる期間におわたって、生き生きと描かれている。ジンバブエの場合だけでなく、ハイパー・インフレーションを生活者の視点から全体的に捉えた研究はきわめて稀であり、本研究は高い価値を有すると言える。

本研究は、たんに「極限の状況を記述した類い稀な民族誌」として意義があるだけではない。民族誌記述を人類学理論と、きわめて巧みに接合している点に、さらにおおきな意義がある。ここでの理論とは、第一に貨幣に関する人類学的研究であり、具体的には複数の貨幣が同時に並存する「多面的貨幣状況」が、経済学と人類学の先行研究を批判的に参照しつつ論じられている。そのさい、ジンバブエ・ドルと外貨である米ドルの並存だけでなく、ジンバブエ・ドル内部の差異、つまり現金と銀行口座の預金、および高額紙幣と低額紙幣の差異に注目し、多面的貨幣状況がより複合的かつ動的に分析されている。本研究は、従来の経済学と人類学における貨幣研究に対する批判として十分に成立しており、多面的貨幣状況に関する一般的な理論的理解を深めるものとして評価できる。第二に、人類学者ジェイムズ・ファーガソンの研究に依拠しつつ、経済的危機だけでなく「意味の危機」について理論的考察を深めている。世界的なレベルでの人類学の発展において、過去2、30年のあいだに出版された、アフリカの様々な危機状況に関する研究が果たした役割はおおきい。しかし、学位申請者は、これらの研究の意義は認めつつも、当事者自身が危機状況に対して感じる不満や不安を捉える枠組みは十分には提供してこなかったと批判し、意味の危機に注目する。そして、ハイパー・インフレーション下における人びとの対応は、経済的危機と意味の危機の両方に直面した人びとが、自分の特異な経験に意味を付与し理解しようとして苦闘する過程にほかならないと結論づけている。これは、「危機の人類学」のあらたな展開に対する貢献であると位置づけることができる。

本研究は、「民族誌と理論の巧みな接合」に成功していると述べたが、それは二つがたんに接木されているということではなく、民族誌記述のなかに理論がすでに織り込まれているということである。この点において、本研究は第一級の人類学的研究であると言える。

以上の理由から、本学位申請論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判断するものである。